

項 目 名	オムツはずし
表 題	オムツはずしへの挑戦
施 設 名	福角病院（介護療養型医療施設）

### 1 取り組みを始めた経緯、きっかけ

自立している人以外はほとんどの患者が終日オムツをしている状態でした。紙おむつの種類も少なく、個別性のない定時交換、オムツカバーで固く縛られていた。何とかならないだろうかと思ったことがきっかけでした。

平成 14 年 5 月に関連施設である介護老人福祉施設が福岡県の有吉病院を見学し、オムツ外しの伝達講習を受ける。

平成 14 年 6 月に愛媛県主催による「身体拘束廃止トップセミナー」に出席し、講師であった有吉先生がオムツは身体的、精神的拘束と話され、実施してみようと決断した。平成 14 年 8 月にオムツ外し委員会を設置し、10 月からオムツ外しを開始した。

### 2 取り組みを行った成果

オムツ外しを行うため、排泄ケアの勉強会、個別ケアを行うための業務の見直しを行った。そのことにより、職員が一致団結し、取り組みへの士気が高まった。

夜間は吸収力が高く、拘束感の少ないオムツを使用することで、夜間安眠ができ、結果昼間に生き生きとして過ごすことができることから、リハビリテーションに集中できるようになった。

股間可動の制限が取れるとともに、トイレ誘導により下肢筋力の訓練となることから、ADL の向上につながった。

トイレ誘導をすることで、患者との関わりが多くなり、意思疎通がとれ信頼関係が強くなった。座位での排尿のため残尿が減少し、尿路感染が少なくなった。

オムツ交換に費やしていた時間を他の QOL の向上に充てることができた。

### 3 拘束に至った経過や原因と考えられるもの

オムツ外しなど無理と考えていたが、実際にオムツを外すことができたことから、やればできるという職員の自信につながるとともに、患者の尊厳を守られ、オムツによる身体的、精神的拘束がなくなり、QOL の向上になった。

今後は、5 つの基本的ケアの一つ一つをその人の必要性にあわせ、尊重したケアの実現を目指す。

生活の場で自己実現をし、ターミナルを迎えたときのケアのあり方を考えていく。

職員全体で、患者が「今何を必要としているのか。」「何ができるのか。」をいつも考えていけるような教育と環境を作り上げる。

介護療養型医療施設に対応したユニットケアの取り組み